涙じゃ火は消せない

まっきーの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
涙じゃ火は消せない

【Ｎコード】
Ｎ７８５４Ｋ

【作者名】
まっきーの

【あらすじ】
平凡を満喫していた少女に降りかかったのは、全てを奪い去る非凡。
自身の意思とは関係なく、非凡な存在となってしまった少女は何を想い、何を起こすのか。

沈黙と孤独

いつものように帰路に着く。いつものようにとぼとぼ歩く。いつものように何気なく空を仰ぐ。？いつも？はどこにでもあるけれど、今ここにあるべき？いつも？は黒鉛と化し、それとは真逆に違っていた。どういつも通りに振舞おうとも、私の目の前にはもう住むことのできない、家だったそれがいくつか黒い柱だけ残して瓦礫の山となっている。

誰も悪いことはしていない。父さんや母さん、姉ちゃんに弟。誰一人として悪いことはしていない。ただ平凡に暮らして、ただ明るく生きていただけ。

運が悪かった？　冗談じゃない。私の世界は運だけで崩壊するというの？

友達も気味悪がって自主的に近付いてこようとしないし、近付いて来ても同情で話しかけているだけ。ただ慰めているという自分に酔いしれるために私を利用しているだけ。そんな偽善者は私の傷をもっと乱雑に広げていることに気付きもしない。好きだった彼だって同じだった。聞いて、同情して、『運が悪かったね』って言うだけ。だから私は偽善者たちを見限った。それが孤独に拍車をかけることと知っておきながら。

「夕衣。お前は大人だ。お前ならこんな辛いことも乗り越えられる。きっとそうだ」

叔父さんはそう言って上辺だけ悔しげに笑う。

大人はいつもそう。普段は『ガキだ、ガキだ』とわんわん言うくせ、本当に辛い時は『大人だ、大人だ』と言うだけで手伝おうとしない。それだけじゃ飽き足らず、大丈夫かどうかだけ確認してくる。

手伝う気もないくせに、とじっと睨んで拒絶すると怒る。特に叔父さんは直情的な人だから、怒ったら自分じゃ止められなくなって私を殴る。

痛かった。とてもとても痛かった。叩かれた頬も痛かったけど、それ以上に痛かったのはまだ落ち着いていない心だった。家族を失って、もう私には味方なんかいないんだ、って分かって、苦しくて、悲しくて、痛かった。飛び出して家出しようとも考えたけど、それほどの財力も、生きるだけの力や知恵もない私には、到底不可能なことだった。

黒こげの柱だけとなった家に向かって跪く。前屈みになって、胸の前で手を組む。そして、いるかどうかわからない神に祈った。この世界で胸張って生きるだけの勇気をください。それができないのなら弱虫の私に一人で死ねる勇気をくださいと。

――ガリ。後ろでアスファルトの地面を蹴るような乾いた音が聞こえた。

「僕は君に何ができるのかい」

両親も居て、家もあって、成績や容姿も平凡で、何もかも不自由のない雄の高校生が私に話しかけてくる。私は何も返さない。振り返ることも、反応することも、声を出すことも、全て奴の術中にはまることになる。私はもう誰かと会話することもしたくない。そうすれば呆れるか怒るかで逃げ出す。たまに暴力を振るう奴もいるけど、それでも心を傷つけられるより何倍もマシだ。

「あれ……僕、別に怪しい人じゃないしさ。ね？」

「……」

「あ、お祈り中は会話できないのか。そうかそうか」

そう言ってそいつは私の隣に座り込んだ。それから数分が経った。なのにそいつは話しかけることも逃げ出すこともしていないようだ。もしかしたらもうあいつは居なくて、私が勘違いしているだけなんじゃないか。そう思ってそっとうす目を開け、最後に声がした辺りを見る。

居た。じーっとこちらを覗き込んでいた。うす目を開けたことが分かったのか、頬を緩め、背筋を伸ばした。

「お祈り、終わったんだね。じゃあ僕の話を聞いてく――って、あらら」
聞くまでもなく、また目を閉じる。もううんざりだ。他人に好かれようと必死だった昔の私にさえ吐き気がしてくる。同情しかできない豚共とはもう関わりたくない。身勝手に関わってくるな。私はお前らを嫌っている。
「むぅ。君が話したくないのなら話さない方がいいかもしれないな。うん、そう信じるよ。だけど、もし話したくなったら僕のトコおいでよ。君の力になりたいからさ」
それだけ言うと、さっさと立ち上がってどこかへ行ってしまった。呆れや怒りもなかったけど、例外ではなく逃げ出した。話に行ってもきっと言ったことも忘れてしまっているだろう。あんな無責任な発言は忘れよう。忘れていかなきゃ生きていけない。じゃなきゃ相談するかしないかで葛藤して苦しむに決まってる。相談したって力になんかなりゃしない。だから忘れよう。一刻も早く忘れよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7854k/

涙じゃ火は消せない

2010年12月10日03時32分発行